

報はなはた近し、寧を憤まざらむや、と。涅槃經に云ふが如し、「一切の悪しき行は邪見をもちて因とす」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。大丈夫論に云はく「悲の心をもちて一人に施さば、功德の大なること地の如し。己が為に一切に施さば、報を得ること芥子の如し。一の回ひ難む人を救ふことは、余の一切の施に勝る」とのたまふ。

理にあらずして他の物を奪ひ悪しき行を為ひて悪しき報を受け奇しき事を示す縁 第三十

膳臣広國は、豊前国宮子郡の少領なり。藤原宮に宇御たたまひし天皇の代の慶雲二年之巳の秋九月の十五日庚申に、広國忽に死ぬ。三日を逕て戊日の申時に更變りて語りて曰はく「使二人有り。一は頂髪に挙げ束ね、一は少子なり。伴に副ひ往く程は、一の駅度るばかりなり。路中に大河有り。椅を度し金を以ちて塗り蔽る。其の椅より行きて彼の方に至る。はなはだ慈き国有り。使人を問ひて曰はく「是れ何れの国ぞ」といふ。答へていはく「度南國なり」といふ。其の京に至る時に、八の官人有り。兵を佩びて追ひ往く。前に金の宮有り。宮の門に入りて見れば玉有り。黄金の坐に坐す。王広國に詔して曰はく「今汝を召すは、汝が妻の愛へ申す事に依りてなり」とのたまふ。すなはち一の女を召す。見れば昔死にし妻なり。鉄の釘を以ちて頂に打ち尻に通し、額に打ち項に通す。鉄の繩を以ちて四の枝を縛る。八人懸き挙げて將り来る。王問ひて言はく「汝是の女を知りや」とのたまふ。広國白して言さく「実に我が妻なり」とまうす。また問ひたまはく「汝轆はる罪を知りや」とひたまふ。答へてまうさく「我れ知らず」とまうす。女を問ひたまふ。女答へてまうさく「我れ実を知る。吾れを償ひて家より出し遣るが故に、恠み側みして厭媚ふ」とまうす。王広國に詔して曰はく「汝實に罪無し。家に還るべし。然れども慎黄泉の事を以ちて妄に宣へ伝ふることなかれ。もし父を見むと欲はば、南の方へ往け」とのたまふ。往きて見れば実に見が父有り。はなはだ熱き銅の柱を抱きて立つ。鉄の釘三七を其の身に打ち立て、鉄の杖を以ちて、尻に三百段座に三百段夕に三百段、合せて九百段、日ごとに打ち追む。広國見て悲びて語りて言はく「嗚呼云何に凶らむ、是の苦を受くるを」といふ。父子に語りて言はく「我れ是の苦を受く。吾が子汝知るやいなや。我れ妻子を養はむが爲の故に、或るは生物を殺し、或るは八面の綿を貸して強ひ

一 どのうして填まないのでか。
 二 大般若經・維摩經・法華經・涅槃經・阿含經。諸經要集・業因部・雜業緣。
 三 大丈夫論・勝勝品。諸經要集・業因部・雜業緣。
 四 未詳。本説話以外に所伝をみない。
 五 福國皇尊御記、行橋市あり。大郡の次官。
 六 慶雲二年九月は、藤原元孫、いづれに擧つても戊寅朔。九月には庚申の日が含まれていない。十五日は壬辰。文武天皇の代で十五日が庚申となるのは、七〇〇年八月、七〇六年閏一月。
 七 午後三時から五時のころ。
 八 頭頂に鬚を結ち。男子の髮型。
 九 三かちのり。底本訓釈「保止」。
 一〇 駅が置かれた単に距離を示すのではなく、冥界にも駅が存在したのである。伝記・三八三。石長和に、冥界の宿舎(傳)の例がみえる。
 一一 冥界遊行に渡河が叙述されることは多い。
 一二 西陽雜俎・二遊業に「橋師以金碧過北、入一城」とみえる。
 一三 底本訓釈(盛謙)「於毛之宮文」、新撰宇鏡・藤原市貴文、心榮也、於毛君宮之。
 一四 度南國という名の國「度は、わたる。度よつてねりきたえられたる處、永遠の生命を得る處」として南宮が説かれるたとえは、靈玉度人經。また、南宮にいたるとは「度を用いて表現される。「度南は度南宮」と關係がある。「其は於」の意か。
 一五 原文「至其京時」。其は於の意か。

六 冥界の王の居處。死者がそこに生まれる處としての冥界の金宮(本説話の下文に「東方金宮」中巻七緣、十六緣に「金宮」とみえる)とはことなる。
 七 本説話にみえる王には名がつけられていない。閻羅王を解すべきではない。
 八 底本訓釈「阿久文」。本説話ほどの長のもはみえないが、延喜式木土寮には「一尺平釘頭(三寸)かみえる。冥界での刑罰として、体に釘が打たれることは増一阿含經・二十四はじめ諸書にみえ、長阿含經・十九のうに「鉄釘地獄」の名を出すものもある。
 九 三罪を問いたたす。底本訓釈「問世、護世、怨也」。
 一〇 底本訓釈「優く良也比」。優は護と同じ意に用いることがある。本書はその例。
 一一 底本訓釈「施有良女之宜」。
 一二 底本訓釈「阿彌太見」は懸穿である。
 一三 底本訓釈「阿彌太見」(昔日貫)「阿彌毛乃留(於毛彌留か)」。日本書紀・二願彌呪咀。
 一四 底本訓釈「忘(妄か)見(良利爾)」。妄ミダ(名義抄)。
 一五 底本訓釈「忘(妄か)見(良利爾)」。妄ミダ(名義抄)。
 一六 このあたり、説話の展開が虚実である。
 一七 「度南國」という名と關係がある。
 一八 冥界での刑罰として熱い銅柱を抱かせられることは増一阿含經・二十四はじめ諸書にみえらる。底本訓釈「太(か)加之」。抱イタク、ウタク(名義抄)。
 一九 この数字が何を意味するかは不明。
 二〇 冥界での刑罰として鉄杖で打たれることは正法念處經・地持品はじめ諸書にみえる。
 二一 「阿」は重さの單位。一斤の十六分の一。和訓は「ころ」。

て十兩に倍して徴り、或るは小斤の稲を貸して強ひて大斤をもちて取り、或るは人の物を強ひて奪ひ取り、或るは他の妻を奸犯し、父母に孝養せず、師長を恭敬はず、奴婢ならぬ者を奴婢として罵り慢る。是くの如き罪の故に、我が身少しといへども三十七の鉄の釘を立て、日ごとに九百段、鉄の鞭をもちて打ち迫めらる。痛きかな。苦きかな。何れの日か吾が罪を免れむ。何れの時か安き身を得む。汝忽に我が為に仏を造り経を写して我が罪の苦を贖へ。慎々忘るることなかれ。我れ飢ゑて七月の七日に太死に成りて、汝が家に到る時に、汝が家に到る時に、犬を喚びて相はせ、昨ひ追ひ打たしめしかば、飢ゑ熱ひて入りむとせし時に、杖を以ちて懸け棄てき。また五月の五日に赤狗に成りて、入らむとせし時に、杖を以ちて懸け棄てき。また五月の五日に赤狗に成りて、汝が家に到る時に、犬を喚びて相はせ、昨ひ追ひ打たしめしかば、飢ゑ熱ひて入りむとせし時に、杖を以ちて懸け棄てき。また五月の五日に赤狗に成りて、入らむとせし時に、杖を以ちて懸け棄てき。また五月の五日に赤狗に成りて、

一「斤」は重きの単位。上善十錢。小斤の三斤が大斤の一に於たる。實際に貸したものの三倍を貸したとして取り立てることとなる。慶雲三年の頃に、稲は小斤、大斤、どちらでかはるのが普通であつたかは、不明。三觀賢菩薩行法經孝養父母、恭敬師長。二底本訓釈(續)有跋。三底本訓釈(續)有跋。日とされた、とする小南一郎説がある。四底本訓釈(續)有跋。五底本訓釈(續)有跋。六底本訓釈(續)有跋。七底本訓釈(續)有跋。八底本訓釈(續)有跋。九底本訓釈(續)有跋。十底本訓釈(續)有跋。十一底本訓釈(續)有跋。十二底本訓釈(續)有跋。十三底本訓釈(續)有跋。十四底本訓釈(續)有跋。十五底本訓釈(續)有跋。十六底本訓釈(續)有跋。十七底本訓釈(續)有跋。十八底本訓釈(續)有跋。十九底本訓釈(續)有跋。二十底本訓釈(續)有跋。二十一底本訓釈(續)有跋。二十二底本訓釈(續)有跋。二十三底本訓釈(續)有跋。二十四底本訓釈(續)有跋。二十五底本訓釈(續)有跋。二十六底本訓釈(續)有跋。二十七底本訓釈(續)有跋。二十八底本訓釈(續)有跋。二十九底本訓釈(續)有跋。三十底本訓釈(續)有跋。三十一底本訓釈(續)有跋。三十二底本訓釈(續)有跋。三十三底本訓釈(續)有跋。三十四底本訓釈(續)有跋。三十五底本訓釈(續)有跋。三十六底本訓釈(續)有跋。三十七底本訓釈(續)有跋。三十八底本訓釈(續)有跋。三十九底本訓釈(續)有跋。四十底本訓釈(續)有跋。四十一底本訓釈(續)有跋。四十二底本訓釈(續)有跋。四十三底本訓釈(續)有跋。四十四底本訓釈(續)有跋。四十五底本訓釈(續)有跋。四十六底本訓釈(續)有跋。四十七底本訓釈(續)有跋。四十八底本訓釈(續)有跋。四十九底本訓釈(續)有跋。五十底本訓釈(續)有跋。五十一底本訓釈(續)有跋。五十二底本訓釈(續)有跋。五十三底本訓釈(續)有跋。五十四底本訓釈(續)有跋。五十五底本訓釈(續)有跋。五十六底本訓釈(續)有跋。五十七底本訓釈(續)有跋。五十八底本訓釈(續)有跋。五十九底本訓釈(續)有跋。六十底本訓釈(續)有跋。六十一底本訓釈(續)有跋。六十二底本訓釈(續)有跋。六十三底本訓釈(續)有跋。六十四底本訓釈(續)有跋。六十五底本訓釈(續)有跋。六十六底本訓釈(續)有跋。六十七底本訓釈(續)有跋。六十八底本訓釈(續)有跋。六十九底本訓釈(續)有跋。七十底本訓釈(續)有跋。七十一底本訓釈(續)有跋。七十二底本訓釈(續)有跋。七十三底本訓釈(續)有跋。七十四底本訓釈(續)有跋。七十五底本訓釈(續)有跋。七十六底本訓釈(續)有跋。七十七底本訓釈(續)有跋。七十八底本訓釈(續)有跋。七十九底本訓釈(續)有跋。八十底本訓釈(續)有跋。八十一底本訓釈(續)有跋。八十二底本訓釈(續)有跋。八十三底本訓釈(續)有跋。八十四底本訓釈(續)有跋。八十五底本訓釈(續)有跋。八十六底本訓釈(續)有跋。八十七底本訓釈(續)有跋。八十八底本訓釈(續)有跋。八十九底本訓釈(續)有跋。九十底本訓釈(續)有跋。九十一底本訓釈(續)有跋。九十二底本訓釈(續)有跋。九十三底本訓釈(續)有跋。九十四底本訓釈(續)有跋。九十五底本訓釈(續)有跋。九十六底本訓釈(續)有跋。九十七底本訓釈(續)有跋。九十八底本訓釈(續)有跋。九十九底本訓釈(續)有跋。百底本訓釈(續)有跋。

といふ。乃至、善と惡とを造りて受くる所の報等の事を見て、怖り還來る。其の大椅に送り、門を守る人有り。前を遮りて言はく「内に入る者は更に送り出でざれ」といふ。広國暫徘徊る。少子出て来る。時に門を守る人、其の少子を見て長跪きて礼む。少子広國を喚び、片方の脇の門に將至り、其の門を押し開き、將て出て告げて曰はく「速に往け」といふ。広國少子を問ひて云はく「汝は誰が子ぞ」といふ。答ふらく「我れを知らむと欲はば、汝初めて稚き時に写し奉れる觀世音經是れなり」とこたふ。還りて入る。すなはち見れば難還る」といふ。食広國黄泉に至り、善と惡との報を見て、願し録して流布ふるなり。罪を作り報を得る因縁は、大乘經に広く説きたまふが如し。誰れか信はざらむ。所以に經に云はく「現在の甘露は、未來の鉄丸なり」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。広國其の父の奉為に仏を造り経を写し三寶を供養して、父の恩を報い、受くる所の罪を贖ふ。此れより以後、邪を廻して正に趣くなり。

三本本註。大般涅槃經雜行品の取意の文とする原口條の詞がある。現在世で甘露に貪着すれば未來世で熱せられた鉄丸を吞まされる刑を受け苦しむ。三十三縁。下巻二十五縁。にみえる。

二靈字度人經の鐵東の注によれば、南宮には呼員という講の志孝者と生童と稱される童とが話に王と「少子」が登場するの、呼員と生童とが公教的改変を經たのであろう。三底本訓釈(續)有跋。四底本訓釈(續)有跋。五底本訓釈(續)有跋。六底本訓釈(續)有跋。七底本訓釈(續)有跋。八底本訓釈(續)有跋。九底本訓釈(續)有跋。十底本訓釈(續)有跋。十一底本訓釈(續)有跋。十二底本訓釈(續)有跋。十三底本訓釈(續)有跋。十四底本訓釈(續)有跋。十五底本訓釈(續)有跋。十六底本訓釈(續)有跋。十七底本訓釈(續)有跋。十八底本訓釈(續)有跋。十九底本訓釈(續)有跋。二十底本訓釈(續)有跋。二十一底本訓釈(續)有跋。二十二底本訓釈(續)有跋。二十三底本訓釈(續)有跋。二十四底本訓釈(續)有跋。二十五底本訓釈(續)有跋。二十六底本訓釈(續)有跋。二十七底本訓釈(續)有跋。二十八底本訓釈(續)有跋。二十九底本訓釈(續)有跋。三十底本訓釈(續)有跋。三十一底本訓釈(續)有跋。三十二底本訓釈(續)有跋。三十三底本訓釈(續)有跋。三十四底本訓釈(續)有跋。三十五底本訓釈(續)有跋。三十六底本訓釈(續)有跋。三十七底本訓釈(續)有跋。三十八底本訓釈(續)有跋。三十九底本訓釈(續)有跋。四十底本訓釈(續)有跋。四十一底本訓釈(續)有跋。四十二底本訓釈(續)有跋。四十三底本訓釈(續)有跋。四十四底本訓釈(續)有跋。四十五底本訓釈(續)有跋。四十六底本訓釈(續)有跋。四十七底本訓釈(續)有跋。四十八底本訓釈(續)有跋。四十九底本訓釈(續)有跋。五十底本訓釈(續)有跋。

二靈字度人經の鐵東の注によれば、南宮には呼員という講の志孝者と生童と稱される童とが話に王と「少子」が登場するの、呼員と生童とが公教的改変を經たのであろう。三底本訓釈(續)有跋。四底本訓釈(續)有跋。五底本訓釈(續)有跋。六底本訓釈(續)有跋。七底本訓釈(續)有跋。八底本訓釈(續)有跋。九底本訓釈(續)有跋。十底本訓釈(續)有跋。十一底本訓釈(續)有跋。十二底本訓釈(續)有跋。十三底本訓釈(續)有跋。十四底本訓釈(續)有跋。十五底本訓釈(續)有跋。十六底本訓釈(續)有跋。十七底本訓釈(續)有跋。十八底本訓釈(續)有跋。十九底本訓釈(續)有跋。二十底本訓釈(續)有跋。二十一底本訓釈(續)有跋。二十二底本訓釈(續)有跋。二十三底本訓釈(續)有跋。二十四底本訓釈(續)有跋。二十五底本訓釈(續)有跋。二十六底本訓釈(續)有跋。二十七底本訓釈(續)有跋。二十八底本訓釈(續)有跋。二十九底本訓釈(續)有跋。三十底本訓釈(續)有跋。三十一底本訓釈(續)有跋。三十二底本訓釈(續)有跋。三十三底本訓釈(續)有跋。三十四底本訓釈(續)有跋。三十五底本訓釈(續)有跋。三十六底本訓釈(續)有跋。三十七底本訓釈(續)有跋。三十八底本訓釈(續)有跋。三十九底本訓釈(續)有跋。四十底本訓釈(續)有跋。四十一底本訓釈(續)有跋。四十二底本訓釈(續)有跋。四十三底本訓釈(續)有跋。四十四底本訓釈(續)有跋。四十五底本訓釈(續)有跋。四十六底本訓釈(續)有跋。四十七底本訓釈(續)有跋。四十八底本訓釈(續)有跋。四十九底本訓釈(續)有跋。五十底本訓釈(續)有跋。